

# 義務教育段階における英語音声指導の現状と課題

— 「カタカナ英語」に着目して—

教育内容開発コース 和田 あずさ

The Status Quo and Challenges of Teaching English Pronunciation in Compulsory Education:  
with Special Attention to “Katakana Eigo”

Azusa WADA

This paper discusses English phonology teaching in current compulsory education. In this paper focusing on “Katakana Eigo,” or Japanese accented English, the followings are suggested through reviewing previous researches. Firstly, some features of Japanese accented English are organized in terms of English phonetics and phonology. Secondly, two issues of “Katakana Eigo” are stated. Finally, it is showed that “Katakana Eigo” is useful as varieties of language ranging from an interlanguage or a tool for expressing intimacy to vocabulary items, even though it cannot provide models of English pronunciation.

## 目次

1. 問題の所在と目的
2. 「カタカナ英語」の諸相
  - 2.1 英語音声学音韻論における「カタカナ英語」
  - 2.2 「カタカナ英語」の課題
3. 学校英語音声指導と「カタカナ英語」
  - 3.1 学校英語教育における音声指導の現状
  - 3.2 「カタカナ英語」の取り扱い
4. 結語

### 1. 問題の所在と目的

一般に人は、生後1年に満たない間に母語にない音に対する鋭敏性を失い、それ以降は母語以外の言語音声聞き取ったり発音したりする際、無意識的かつ不可避的に母語の音韻体系に依存してしまうとされている。そして、母語の音韻体系に依存した聞き取りや発音は、無自覚に起こる不可避な現象であり(中森, 2009, pp.32-33), 年齢が低い場合には特に化石化されやすいと指摘されている(Nakamori, 2009)。一部には、日本語音韻の影響を受けた英語、言い換えれば日本語訛りのある英語を「World Englishes」<sup>1)</sup>の1つとして位置づけることで、発音が不得手なことに臆せず英語を使おうとする意欲を伸ばしようという立場もある。ただ、母語が異なる相手にとって訛りのある英語は理解に困難を要することを勘案すると、誤った発

音の化石化を防ぎ、より「英語らしい」発音を希求することは、学校英語教育において日本語を母語とする教師と学習者の全てが到達すべき目標というよりむしろ、英語が母語であるか否かに関わらず日本語が母語ではない他者とやりとりをする際の配慮として必要であろう。そこで本稿は、日本語訛りのある英語の端的な例である「カタカナ英語」に着目し、「カタカナ英語」がどのように生まれるか、そして、義務教育段階で英語音声指導がどのように行われ、その中で「カタカナ英語」がどのように扱われているかという点について、一連の研究を概観し、今後の英語音声指導の展望について論考することを目的とする。なお本稿では、もともとなる英単語と同義で使用される外来語として定着していて、日本語音韻に依存して発音される英語を「カタカナ英語」と定義づける。

### 2. 「カタカナ英語」の諸相

#### 2.1 英語音声学音韻論における「カタカナ英語」

「カタカナ英語」の性質を明らかにするために、ここではまず、英語音声学音韻論の学理上、日本語母語話者にとって課題とされる発音の特徴がどのようなものであるとされているかを、中森(2009)、清水(2005)、杉藤(1996)、田辺(2005)などを参照して整理する。本研究では、音韻論上の基本単位のうち語や句の発音に関わる、音素、分節単位、アクセントと

リズムを扱う。

まず、分節的要素である音素について述べる。音素とは、音韻論における音の最小単位で、特定の意味内容を指し示す音声情報を構成するために他の音と区別されるための弁別機能を有している。音素は「不変な物理的実態を持ったひとつの音というよりは、抽象的な、機能の概念と余剰な音声的弁別特性の束として、種々の条件によってその実体を変えながら、ある許容範囲の幅の内側に存在すると考えられる、いくつかの音の集合体のようなもの」(竹蓋, 1984)であるので、実際には、単語の中の位置によって調音のされ方、聞こえ方、響き方などの客観的な性質が変わる。日本語母語話者にとって課題となる音素は、日本語にないために聞き取りと発音が困難であるものと、日本語の似た音素と混同されやすいものがあるが、おおむね以下の要素が挙げられる。

- 語頭の/p/, /t/, /k/に、帯気音でない日本語のバ行、タ行、カ行が転用され、/b/d/g/との区別が不明瞭に聞こえる
- 破裂しない語尾の/p/, /t/, /k/, /b/, /d/, /g/は、調音はされるが音声としては聞こえないので消失される
- 歯茎鼻音/n/に、舌先を歯茎に付けない日本語の「ン」が転用されることで消失される
- /θ/やð/に日本語のサ行やザ行、もしくはタ行やダ行、/f/やv/に日本語のハ行やバ行、/w/に「ウ」が転用される
- /r/とl/を混同したり、日本語のラ行が転用されたりする
- /s/とʃ/, /z/とdʒ/, /ʒ/とdʒ/, を混同したり、日本語のサ行やザ行が転用されたりする
- 英語の短母音や弱母音に日本語の母音が転用される  
(e.g. /a/, /æ/, /ɜ/, /ə/が、全て「ア」と発音されてしまう)
- 二重母音やR音声母音を長母音化する  
(e.g. /ei/を「エー」、startの/a:r/を「アー」と発音する)
- 直後の子音によって変化する短母音の長さを区別せず、促音を挿入する  
(e.g. backとbagの場合、/æ/の長さを区別せずに「バック」、 「バッグ」と発音する)

次に、超分節的要素である音の分節単位と、それに

よって形成されるアクセントとリズムについて取り扱う。前者については、英語は音節、日本語はモーラと、異なる分節単位が用いられる。この場合の音節は通常「syllable」の訳語を指しており、音素より大きな単位で、母音を中心とする音のまとまりとされている。それに対しモーラとは、音節の長さを示す単位である。基本的に平仮名1文字(母音のみ、もしくは子音と母音の1組)が1モーラに対応するため、撥音や促音は1モーラ、長音や二重母音は2つに分割されて2モーラ、拗音は直前の仮名と併せて1モーラと換算される。つまり、撥音と促音を除けば、子音で音節が終了したり子音が連続したりすることはない。このような違いによってモーラを単位として英語を知覚したり発音したりすることで、次のような課題が見られる。

- 子音の後ろに不要な母音を挿入する<sup>2)</sup>
- 子音結合や単語末尾の子音などへの母音や短母音への促音の挿入により、モーラ数が音節数に対し過剰となる  
(e.g. bag (1音節) → バッグ (3モーラ),  
strike (1音節) → ストライク (5モーラ))

最後に、アクセントとリズムの問題に触れる。音節やモーラは強さ、長さ、高さなどを与えられ、他の音節から卓立して知覚されることで、語アクセントを形成する。アクセントは、強さ、長さ、高さの3つが連動して生成されるが、生理的・物理的な量として測られるものではなく、3要素の相対的な関係において知覚上重要とされる度合いによって各言語のアクセントが分類される。英語が強勢アクセントで日本語が高低アクセントであると言われているのは、英語では特定の音節の卓立が音の強さ(もしくは大きさ)、長さ、高さを総合した強さによって規定され、日本語はモーラごとに音の高低が区別されるということである。そして、リズムとは経時的な進行の中であるまとまりが規則的に反復されることを指す。すなわち、単語が連なって句や文を形成する時、強勢のある音節と無強勢の音節とが明確に区別され、繰り返されることが、言語のリズムに繋がる。このような性質は等時性と呼ばれ、厳密な物理現象というよりも強勢間の距離が一定に保たれて繰り返されることを望ましいとする傾向とされる。そのため、実際に強音節間の時間もしくは強音節に挿まれた弱音節の数が均等になるわけではないが、より自然なリズムを保つために強音節間に介在する弱音節が単純化を強いられる結果、聞こえないほど

短くあいまいに発音されたり、語と語の間の子音や母音がつながったり、調音が同じか似ている音の片方が脱落したりする。以上のような特徴を持つ英語音声に対して、各子音に母音を挿入して1モーラとして発音し、その際に音の高低の変動がモーラの切れ目で生じ、どの母音も弱くあいまいになることはないという日本語のアクセントやリズムの性質が適用される結果として、下記のような傾向がある。

- 英語の弱音節が強音節と同様の長さや強さと明瞭さで発音されるため、アクセントの位置が分からなくなる
- アクセントを付帯させるために、音高を高くするのみであるか、短母音へ促音を挿入して本来長くあるべき母音がかえって短くなる

以上の要素を踏まえると、日本語母語話者特有の英語の典型として一般に周知される「カタカナ英語」の特徴とは、日本語の音素を転用したり必要な音素を消失したりすること、子音に母音を挿入して英語の弱音節と強音節が区別できにくくなったりアクセントの付帯方法が不適切であったりするために英語として不自然なリズムになってしてしまうことと言える。

## 2.2 「カタカナ英語」の課題

このような特徴を持つ「カタカナ英語」は様々な課題をはらんでいるが、特に大きなものとして2点を取り上げる。1点は、非日本語母語話者にとっての理解しづらさについてであり、もう1点は日本語母語話者にとっての克服しづらさについてである。

前者については、英語母語話者及び非英語母語話者の英語の聴解方法と、英語学習者の習熟度による音声処理の方法に着目して述べることができる。鈴木(1992)は、日本語母語話者と英語母語話者がそれぞれ音読した英文のアクセント、リズム、イントネーションなどの韻律を入れ替え、個々の音素は英語で韻律は日本語的な音声と音素は日本語的で韻律は英語という2種類の合成音声を作成して英語らしさや聞きやすさを英語母語話者に判定させる実験で、英語母語話者にとっては音素が英語らしい音声よりも韻律が英語らしい音声の方が支持されるという結果を導いている<sup>3)</sup>。また、鈴木(1992)の実験では、高さ、長さ、強さの要素について日本語母語話者のものと英語母語話者のものを入れ替え、どの要素が英語の聞き取りにおいて重要かをアメリカ人のイギリス人に判定させた結

果、総じては高さや長さが強さより影響力が強い(アメリカ英語では高さ>時間>強さ、イギリス英語では高さ≒時間>強さ、二つの要素を組み合わせる場合には高さ+長さ>高さ+強さ>長さ+強さの順で重視される)ことが明らかにされた。これらの結果から、英語母語話者にとって、モーラリズムに影響を受けた「カタカナ発音」は英語として不自然であることは明白である。さらに、Broersma, Aoyagi and Weber (2010)とWeber, Broersma, and Aoyagi (2011)では、日本語訛りのある英語は日本語話者には認識されるがオランダ語話者には認識されづらいこと、両言語話者にとって、母語訛りでも非母語訛りでも英語の音韻体系に近い発音の方が認識しやすいことが示されている。換言すれば、母語訛りのある英語は母語を異とする相手には聴き取りづらく、母語が同じであってもより英語音韻に近い発音である方が理解されやすいということである。

加えて、英語学習者の習熟度によって、英語音声はボトムアップ式もしくはトップダウン式に処理されることについて触れておく。ボトムアップ処理とは、音声刺激を音素や音節などのより小さな単位で認識し、単語、句、節、文、というように、より大きな単位の情報として再認識しながら意味認知に至る方法であり、トップダウン処理では、過去に蓄積した知識をもとに予測や推測を加えながら、与えられた音声情報全体を認識することで意味を理解する(藤本, 2014, p.91)。そして、英語母語話者や英語習得が進んだ学習者はボトムアップとトップダウン、両方の処理を行うことができるが、初学者にとってはボトムアップ処理がより基本的で重要である(O'Mally, Chamot, and Kuper, 1989; Chien and Wei, 1998; Walker, 2010)。すなわち、より多くの英語話者にとって理解しやすい英語発音とは、音素レベルでの発音も、音節レベル以上の発音も、より英語音韻に近い形である必要があるといえる。

一方で、日本語が母語である英語学習者にとって、「カタカナ英語」を払しょくすることは非常に困難である。これが後者の課題であり、その兆候は、音声言語の習得に長けていると一般に言われている幼児期からすでに見ることができる。日本語を母語とする幼児が英語音韻を習得する能力について調査した研究には、湯澤・湯澤・関口(2009)、李・湯澤・関口(2009)、湯澤・湯澤・関口・李(2012)がある。インターナショナルスクールに通う年少児と年長児を対象に行われた湯澤・湯澤・関口(2009)の研究では、英非単語反復

課題では音節総再生数に年齢と音節数が影響を与えていること、5音節からなる英非単語反復の成績と、英語の音韻認識の成績および、日本語の語彙量に関連があることなどが明らかにされた。次に、李・湯澤・関口(2009)では、日本語を母語とする幼児と中国語を母語とする幼児の英語の音韻処理に違いを検討した結果、日本語母語幼児は、1音節の英単語の語頭音の同定には優れていたが、聴覚提示された反復する課題の成績が悪かったことから、英単語をひとまとまりの音として発音することに音韻習得上の課題があることが示唆された。さらに湯澤・湯澤・関口・李(2012)では、この調査を発展させ、中国人幼児、日本人幼児、国際幼稚園に通う日本人幼児に対し、英語日単語反復課題を与える調査を行い、中国人幼児に比べて日本人幼児が一度に反復できた音節数は少なく、音節数のより少ない段階で上限となること、国際幼稚園の幼児に関しては、短い非単語を反復する能力は英語の母語話者並みに発達しているものの、長い非単語の場合は4歳児でも6歳児でも能力に差がなく、英語環境で幼児期に生活していても日本語音韻の影響をなくすことは容易でないことが示された。

上記のような傾向は英語習熟度が進むにつれて改善されるのかという問いについては、上山(2003)が示唆を与えている。この研究では、日本人英語学習者とアメリカ人日本語学習者を比較しながら、音節の構造認識と、それに習熟度が与える影響を検証している。その結果、日本人英語学習者は英語習得上級段階の学習者でも半数以上が英語音節の文節単位にモーラを用い、アメリカ人日本語学習者は、初級者の半数以上が特殊モーラの認識を誤ったが、上級者の場合は全員日本語母語話者と同じように音節構造を認識できたことが判明した。このことより、日本語母語話者が英語の音節構造認識に対して長期にわたって日本語の影響を受ける傾向にあることが分かっている。

### 3. 学校英語音声指導と「カタカナ英語」

#### 3.1 学校英語教育における音声指導の現状

ここまで見たように、日本語母語話者にとって、日本語音韻の影響を取り払うことは、幼児期であっても、もしくは習熟が進んでも、あるいは英語に多く触れられる環境下であっても、困難であることが明らかになっている。このことから、就学後の英語音声指導においては、日本語と英語の音韻構造の違いを明示することが必要だと考えられる。他方、市崎(2009)の

報告によると、現在外国語活動で行われている音声指導は発音や聴き取り一般に対する抵抗感を軽減したりそれらの能力の向上に寄与したりしてはいるものの、英語特有の音素の発音には機能しておらず、音の脱落や連結、イントネーションなどにおいては中学校でも指導が困難であるとのことである。換言すれば、外国語活動を経験している児童は、中学校で初めて英語を学んだ場合よりも、英語を聞いたり発音したりすることに慣れてはいるが、正確な発音を習得しているかという点に関しては確認されていない状況にある。また、中学校以降でも、生徒の多くが「カタカナ英語」で発音しており、その原因として、授業時数の少なさや発音指導の方法の不明確さに加え、「発音の指導を行うと、日本語でさえ意見交換をしようとしないう生徒は、面倒くさいと感じてしまったり委縮してしまったりして、英語で話そうとしなくなる」、「大切なのは話す中身と姿勢であって、発音を矯正する必要はない」などの意識が教員に窺えると手島(2011)は指摘している。そこで本節では、教員間の指導による差を除外するために、小学校の外国語活動で用いられる副読本「Hi, friends!」における各音韻要素の取扱いについて検討するとともに、上田・大塚(2010, 2014)の中学校検定教科書の分析を参照し、義務教育課程における英語音声指導の現状をまとめる。

小学校に関しては、知識や技能の習得を目的としない外国語活動においては、英語発音を分析的に学習・教授する自体が不適切である(文部科学省, 2008)とされ、児童の発音の誤りを過度に修正すると、児童の英語嫌いにつながってしまうと考えられていることから、個別の音韻要素の明示的な指導は避けられる傾向にある。「Hi, friends!」においても、2章で扱った各音韻要素に関する記載はないので、児童に対してこれらが明示されるかどうかは、各教員の指導に委ねられている。ただし、付属のデジタル教材には歌やチャントが収録されており、英語が不得手の教員が授業者であっても、児童がまとまりのある英語音声を目にしたり口にしたりする機会が保障できるようになっている。デジタル教材でも音声の明示的な指導はないものの、特に強く発音する単語に関して、イラストが弾むように大きくなるアニメーションを付けることで、児童の注意を喚起する仕掛けがある。また、今年度より新たに普及された補助教材「ワークシート」では、アルファベットの文字と音との結びつきを認識させる活動を取り入れることにより、従来に比べて音素や音節と英語の発音の関係が、より分かりやすいものとなっ

ている。量としても質としても決して十分であるとは言えないが、教科外活動として体験的に英語音声に触れることに主眼を置いている現行の学習指導要領化において、各活動に必要な英文を対話形式で取り入れる中で、英語の強弱リズムやイントネーションに慣れ親しむことができるように配慮されていることが見受けられる。他方、旧副読本である「英語ノート」では、外来語を扱う単元が設定されており英語との発音の違いを体感できるようになっていたが、「Hi, friends!」にはその単元が削除されて、Lesson 4からLesson 7の指導資料の中で部分的に触れられているのみである。したがって、英語と日本語の発音やリズムの違いを明示する機会が失われ、児童が外来語として慣れ親しんでいる語彙を「カタカナ英語」で発音しないように注意を喚起することが難しくなっている。

一方、明示的、系統的な指導が可能となる中学校における指導はどのような状況にあるのだろうか。上田・大塚(2010)では、発音記号や取り扱われる音素に関して、教科書間にばらつきがあること、採択率の高い教科書に、音声表記としてのカタカナ使用が見られることが課題として挙げられた。また、強勢については、6社中4社が最も強い部分の強勢のみを示すにとどまり、句強勢は全ての教科書で積極的に取り扱われていないこと、文強勢については、強く読む部分は示されるものの、弱く読むとは具体的にどのように発音されることであるかにまで言及しているのは1社のみであり、強弱リズムがどのように生成されるかの説明はなかったことが明らかになった。上田・大塚(2014)では、学習指導要領改訂を受け、音声指導材料の取り扱いや学習者への指導項目の提示の仕方や量がどのように変化したかに着目して、新しい検定教科書の分析を行っている。その結果、取り扱われる音素に増減が見られ、イントネーションとスピーチに関連する追加記述が見られた一方、強勢やリズムについては旧版の解説がそのまま引き継がれているとのことである。また、人称代名詞のような機能語に強勢が付けられていたり<sup>4)</sup>、どのような規則に基づいて強弱音節が配列され単語が発音されるかという言及がなかったりするなどの課題が継続して残されているようである。

加えて、学校英語教育における音声指導に対する学習者の印象について述べておく。太田(2012, 2013)が大学生を対象に中学校及び高等学校でどの程度発音指導を受けたかについてアンケート調査では、発音指導を「まったく受けていない」か「ほとんど受けていない」と回答した学生数が9割前後であったとのこと

である。特に後年の調査では、子音の発音、音変化、リズム、日本語と英語の発音やリズムの違いなどの項目に関して、指導を受けたと捉えられていないという状況が浮かび上がった。さらに、英語音声学を受講した大学生の感想として、受講前に比べて細かいところ意識を向けて英語を発音したり聴いたりするようになった、英語学習の早い段階から英語音声学を学びたかったという複数名の記述が紹介されている。いずれの調査でも母集団が小さいため、この結果を一般化することは難しいものの、学習者側にとっても英語音声指導が十分ではないという実感があることが示されている。

### 3.2 「カタカナ英語」の取り扱い

昨今コミュニケーション中心主義が英語教育の主流となる中、しばしば「日本語訛りがあっても、誤りを恐れずに堂々と英語を話せばよい」、「日本語訛りを世界に多々ある英語の方言の1つとすべきではないか」などの意見が散見される。また、日本には外来語として数多くの英語語彙が身近なものとなっており、英語を話す際にも「カタカナ英語」が用いられることは珍しくない。しかし、英語教育現場では、必ずしも英語発音としての「カタカナ英語」が許容されているとは言えない。

伊藤(1991)はこのような「カタカナ英語」を中間言語として捉え、分類、整理、体系化することを通して英語教育のために教材化する必要性を唱えている。この場合の教材化とは、語彙の面で「カタカナ英語」が児童の既有知識となり得るという視点に基づくものと捉えられる。例えば佐治・佐伯(2012)では、小学校6年生の英語語彙に対する親密度と4技能の相関関係が調べられ、リスニングとスピーキングに関して弱い正の相関が見出されたことから、初学者に対しては語彙への親密性を向上させることがこれらの技能の習得に寄与することが示唆されている。また、笠原他(2012)の調査でも、小学生の英語における受容的語彙知識のうち、「カタカナ英語」の知識が英単語の知識を上回ることが分かっており、発音や意味の取り扱いについては慎重であるべきだとしながらも、児童の既有知識として有効に活用すれば、新しい知識の習得が容易になるだろうと結ばれている。つまり、英語を学ぶ上で「カタカナ英語」を積極的に活用しようとする立場とは、英語本来の発音に代わるものとして「カタカナ英語」を用いることを肯定するものではなく、活動への興味関心を喚起し、日本語と英語との音声の

違いに着目させるための教材とすることを重視しているものと考えられる。

そして、英語音声学音韻論においては一般的に、英語本来の発音を重視する立場から、「カタカナ発音」自体は受け入れがたいという姿勢が示されている。例えば中森(2009)は、発音のカタカナ表記について、子音に母音を挿入しない、二重母音を長母音で発音しない、強勢を付ける、などの点に気を配り、学習者自身がルビを振らなくても授業に参加できるように指導を行うことが必要であるとした上で、初級の学習者を助ける観点から言えばカタカナルビを活用しても構わないと、一定の歩み寄りを見せながらも、英語の音声を仮名という日本語を介して処理する過程はカタカナ発音を常習化させてしまうため、学習者自身がカタカナを不要とするようになるような指導の展開が望まれると述べている(p.49)。また、佐治・佐伯(2013)が行った調査では、児童の単語親密度が高かった、gorilla, nose, mouth, hipという4つの単語について、多くの児童が「ゴリラ」「ノーズ」「マウス」など、カタカナに依拠した発音となっており、hipは発話自体もできなかったことが報告され、活動前に既に外来語として知っている語彙は適正に発音されない傾向があるので、修正が必要であると示唆されている。さらに、先に挙げた上田・大塚(2014)では、旧学習指導要領時の検定教科書にあった発音表記としてのカタカナ使用が現行版においてはなくなっており、カタカナ発音では英語として通じないという注意喚起が加わっていたことが指摘されている。加えて、日本語にカタカナ英語を持つ英単語を母語話者が発音した際の聴解について実験を行った吉田・松田(1988)の研究結果からは、児童にとって英語本来の音声とカタカナ英語の結びつきはさほど強くなく、カタカナ英語の音声を英語の音声に円滑に変換する指導が必要であると導かれている。

#### 4. 結語

本稿では、日本語母語話者に顕著な発音の特徴として「カタカナ英語」を取り上げ、音声学音韻論上どのような仕組みで「カタカナ英語」が形成されるか、日本語音韻の影響がいかに大きく、避けがたいものであるか、英語発音時になぜ「カタカナ英語」を避けるべきか、などについて述べた上で、小学校及び中学校における英語音声指導が、より自然でわかりやすい英語発音を習得するためにどのような点での課題を有して

いるか、学校英語教育における「カタカナ英語」はどのように扱われているのか、という実情を整理した。2章では、「カタカナ英語」の特徴を整理し、日本語母語話者以外の英語話者にとって、理解するのに相当な負担をかけるものであることを述べた。このことから、「カタカナ英語」を「World Englishes」の一つとして位置づけることにより、聴き手に一方的な負担を強いる可能性が導かれる。それは相手を慮ることを怠るという点において、不健全なコミュニケーションにつながると言わざるを得ないだろう。また、3章にて教材と指導の実際を検討したところ、「カタカナ英語」の扱いはあくまで学習者の学びの実態を詳らかにする中間言語として、もしくは語彙の親密性との関連から活用されるにとどまり、英語音声として許容する立場は見当たらなかった。このことから、英語音声を指導するにあたっては、母語話者と同程度とはならずとも、日本語以外の言語を母語とするあらゆる話者との対話における話し手としての配慮として、英語としてより自然で分かりやすい発音を心がける必要性が改めて見出された。

2011年度より現行の学習指導要領が実施されてからは、全ての小学校で外国語活動が悉皆的に行われているが、次期学習指導要領を検討している現在においてはすでに、小学校5,6年生で教科としての外国語学習が70時間設定され、従来の外国語活動は3,4年生に引き下げられることが方向づけられている(教育新聞, 2015年8月10日号)。さらに、内藤・野本(2015)の調査では、私立の保育園や幼稚園では積極的に英語母語話者を講師とした英語活動を行っているとのことである。英語母語話者による指導頻度にも指導にあたる教員の英語運用能力にも大きなばらつきがある公立の小中学校においてはなおさら、英語音声のあり方に関する今一度の検討は必然である。これに関しては例えば、Mori et al. (2014)が、具体的な改善策を導くための一助となり得る。この研究では、日本語母語話者が話した英文に、内容後の母音伸長、機能語の母音短縮、挿入母音除去という3種類の音声加工を施した音声刺激をアメリカ英語母語話者及び日本語母語話者に評価させたところ、両者ともに機能語の母音短縮と挿入母音除去の加工をしたものが最も自然であると判断したのに対し、内容語の母音伸長については、自然さの点でも分かりやすさの点でも、肯定的な評価を得られないことが判明した。この結果から、英語の強弱リズムに関しては、現状のように強勢を有する部分を強く発音することではなく、強勢のない部分を弱く、

つまり短く、小さく、曖昧に発音すること、不要な母音を挿入しないために子音及び子音連結の発音に気をつけることを、指導の重点とすることができる。このように、英語音声学音韻論における個別の音韻要素の課題に対しての実証研究から日本語母語話者にとって必要な指導内容を詳らかにし、それらを活用して教材の作成や指導法の充実にあたるのが、今後の英語音声指導の課題として挙げられる。

## 注

- 1) 現在英語は「English as an International Language」, 「English as a Lingua franca」などと呼ばれる地位を確立し、母語話者と第二言語話者を合わせると世界の4人に1人が英語を話すとされる。このような中、英米の植民地だった地域の文化や言語と結びつくことで独自の体系を構築した多様な英語が、「World Englishes」という概念で包括されることで、母語話者の英語と同等のものとして位置づけられている。それに伴い英語音声教育でも、母語話者に近づくことよりも、「intelligibility」(明瞭性)と「teachability」(現実的に教授・指導が可能であるか)を考慮して教授内容を精選することが重視されている。
- 2) 例えばLee, Guion, and Harada (2006) では、日本語母語話者の英語音声について、強勢のない音節で母音の弱化が起きにくいという特徴が報告されている。このことから、英語発音時のモーラの強い影響が窺える。ただし、かつてはDupoux et al. (1999) により、子音が連続する音韻構造を持たない日本語の母語話者は、子音結合間に“幻の”母音を聞いていることにより母音を挿入すると主張され、Masuda and Arai (2010) も英語音声の知覚と産出への幻の母音の影響を示したが、藤本・船津 (2008) の調査では、日本語母語話者はすべての子音連結に母音を挿入するわけではないという結果が導かれたことから、子音連結の調音困難によって母音が挿入されるのではないかという示唆が加わっている。
- 3) Tajima, Port, and Dalby. (1997) においても、中国語話者の英語音声について、発話リズムをそのままにして個々の音素をアメリカ英語話者の音質に修正したものと音素の音質をそのままにしてアメリカ英語話者の発話リズムをもとに各音素の継続時間を修正したものをアメリカ英語話者に聞かせ、流暢さを評価させたところ、後者がより高い評価を得ている。
- 4) Mori (2005) の調査では、本来は強勢がない文頭の機能語を後続の内用語より高く発音する‘initial high pitch’という日本人英語学習者の特徴が明らかにされているが、このような現象は強弱リズムの均整を乱すだけでなく、聞き手に話し手の意図とは異なる印象を与えることにもなりかねない。

## 引用文献

- Broersma, M., Aoyagi, M. and Weber, (2004). A. Cross-linguistic Production and Perception of Japanese- and Dutch-accented English. 『音声研究』 14(1): pp.60-75.
- Chien, C, and Wei, L. (1998). The strategy use in listening comprehension for EFL learners in Taiwan. *Journal of Language Teaching and*

- Research*, 29: pp.66-91.
- Dupoux, E., Kakehi, Y. Hirose, Y., Pllier, C. and Mehler, J (1999). Epenthetic Vowels in Japanese: A perceptual illusion? *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 25: pp. 1568-1578.
- Field, J. (2003) Promoting perception: lexical segmentation in L2 listening. *ELT Journal*, 57: pp.325-334.
- 藤本恵子 (2014) 「音韻知識が日本人EFL学習者のリスニングに与える影響について」 *JACET Kansai journal*, 16: pp.90-102.
- 藤本雅子・船津誠也 (2008) 「日本語話者の子音クラスタ中への母音挿入」『電子情報通信学会技術報告書 SP音声』 107: pp.105-109.
- 市崎一章 (2009) 「小学校英語教育への提言」『英語音声学』 13: pp.457-471.
- 伊藤嘉一 (1991) 「中間言語としてのカタカナ英語の活用」伊藤嘉一・金谷憲・野田哲雄 (編) 『現代の英語教育学研究』 弓書房. pp.281-288.
- 笠原究・町田なほみ・長田恵理・高梨庸雄・吉澤小百合 (2012) 「小学校5, 6年生の語彙知識: 声, 意味, 文字の結びつきに関して」 *JES journal*, 12: pp.90-101.
- Lee, B., Guion, S. and Harada, T. (2006) Acoustic analysis of the production of unstressed English vowels by early and late Korean and Japanese bilinguals. *Studies in Second Language Acquisition*, 28: pp.487-513.
- 李思娟・湯澤正道・関口道彦 (2009) 「日本語母語幼児と中国語母語幼児における英語音韻処理の違い」『発達心理学医学研究』 20(3): 289-298.
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』 東京: 東洋館出版社.
- 文部科学省 『Hi, friends! 1, 2』
- 文部科学省 「ワークシート」 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm)
- Mori, Y. (2005). The initial high pitch in English sentences produced by Japanese speakers. *English Linguistics*, 22: pp. 23-55.
- Mori, Y., Erickson, D., Riiliard, A. and Hori, T. (2014). Effects of Vowel Duration, Intensity, and Articulation Rate on Judgments of Naturalness and Intelligibility of Japanese Learners' English. 『音声研究』 18(2): pp.30-41.
- Nakamori, T. (2009). *Chunking and Instruction: The Place of Sounds, Lexis, and Grammar in English Language Teaching*. 東京: ひつじ書房.
- 内藤徹・野本尚美 (2015) 「英語教育の現在—小学校, 中学校, 高校および保育園, 幼稚園での英語教育—」『仁愛女子短期大学研究紀要』 46, pp.23-29.
- 中森誉之 (2009) 『学びのための英語学習理論: つまずきの克服と指導への提案』 東京: ひつじ書房.
- O'Malley, J., Chamot, A. and Kupper, L. (1989). Listening comprehension strategies in second language acquisition. *Applied Linguistics*, 10: pp.418-437.
- 太田かおり (2012) 「日本の英語科教育における音声指導の現状: 初期英語教育における音声指導の導入及びその教授法の確立を目指して」『九州国際大学社会文化研究所紀要』 69: pp.53-73.
- 太田かおり (2013) 「日本の英語教育における盲点—音声教育の現状と課題—」『九州国際大学国際関係学論集』 8: pp.37-69.

- 佐治量哉・佐伯泰子 (2012) 「小学校 6 年生の語彙理解度と単語親密度に関する考察」 *JES journal*, 12 : pp.115-124.
- 佐治量哉・佐伯泰子 (2013) 「単語親密度と発話能力の習得—小学校 4 年生を対象として—」 *JES journal*, 13 : pp.150-162.
- 清水あつ子 (2005) 「日本人の英語発音の弱点—アクセント・リズム・イントネーション—」日英言語文化研究会 (編) (2005) 『日英語の比較：発想・背景・文化 (奥津文夫教授古稀記念論集)』東京：三修社, pp.239-247.
- 杉藤美代子 (1996) 『日本人の英語 (日本語音声の研究 2)』大阪：和泉書院.
- 鈴木博 (1992) 「言語技術としてのプロソディー」『言語』 21(9) : pp.38-45.
- 竹蓋幸生 (1984) 『ヒアリングの行動科学—実践的指導と評価への道標—』東京：研究社出版.
- Tajima, K., Port, R. and Dalby, J. (1997). Effects of temporal correction on intelligibility of foreign-accented English. *Journal of Phonetics*, 25: pp.1-24.
- 田辺洋二 (2005) 「音声面における英語らしさと日本語らしさ」日英言語文化研究会 (編) 『日英語の比較：発想・背景・文化 (奥津文夫教授古稀記念論集)』東京：三修社, pp.215-222.
- 手島良 (2011) 「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について—発音指導の現状と課題—」『音声研究』 15(1) : pp. 31-43.
- 上田洋子・大塚朝美 (2010) 「発音と音声のしくみに焦点をあてた中学校英語教科書分析：インプットの基礎を考察する」『大阪女学院大学紀要』 7 : pp.15-32.
- 上田洋子・大塚朝美 (2014) 「中学校英語検定教科書における音声指導項目の分析：新旧学習指導要領での扱いの変化について」『大阪女学院大学紀要』 10 : pp.1-15.
- 上山素子 (2003) 「第二言語習得における音節構造認識：日本と英語の場合」『音声研究』 7 (2) : pp.84-100.
- Walker, R. (2010). *Teaching The Pronunciation of English as A Lingua Franca*. Oxford: Oxford University Press.
- Weber, A., Broersma, M., and Aoyagi, M. (2011). Spoken-word Recognition in Foreign-accented Speech by L2 Listeners. *Journal of Phonetics*, 39(4): pp. 479-491.
- 湯澤正道・湯澤美紀・関口道彦・李思嫻 (2012) 「日本人幼児における英語音韻習得能力—英語非単語反復による検討—」『教育心理学研究』 60 : pp. 60-69.
- 湯澤美紀・湯澤正通・関口道彦 (2009) 「日本人幼児の英語音韻習得のプロセスに関する研究：音韻的作業記憶、音韻認識、日本語語彙からの検討」『発達研究』 23 : 189-200.

(指導教員 齋藤兆史教授)